

World's Window

さあ、窓を開けて世界をのぞいてみようよ



Vol.42

グアム



世界の国々や地域を紹介するコーナー「ワールズ・ウィンドウ」!

案内役は、国際交流員のアダム・ラビエールさんとジェニファー・ステイントンさんです。

Hello! アダムです。皆さんは横井庄一さんまたは「横井庄一の洞穴」をご存知ですか? これは地下に穴を掘って作った小さくて暗い洞穴で、葉っぱでこしらえたベッドと台所がやっとあるだけの大きさのものです。今回は、グアムの南にある山岳地帯のジャングルにある、この洞穴について紹介したいと思います。

横井庄一さんの**洞穴**は、現在看板と小さな神社が目印となっています。しかし1944年から1972年にかけてこの洞穴には全く目印がありませんでした。この洞穴は誰からも見つけられないようなジャングルの奥深いところにあり、さらにヤシの木と葉で覆われていました。そしてその暗く人目につかない洞穴で、1人の日本兵が28年間生き延びたのでした。

横井庄一さんは愛知県に生まれ、1935年に第一補充兵役に編入、日本軍入り。4年間の兵役の後、洋服の仕立屋を立ち上げるも1941年に太平洋戦争のため再召集されました。その後、ほかの多くの兵士とともにグアム島に配属されましたが、1944年アメリカ軍が上陸し戦争は激化。横井さんをはじめ、多くの兵士が身を隠すために島の密林へ分け入っていったのです。横井さんとほかの2人の兵士はともに身を潜めることにし、降伏しないことを誓いあったのです。3人はそのうち、別行動をとった方が効率的に食料を手にすることができると考え、行動にうつすことにしました。



横井さんは自分で掘った穴に1人で住みはじめ、ほかの2人の兵士は横井さんのところから離れたところに小さな小屋を建て住み始めました。3人はお互いの住居を行き来していましたが、ある日横井さんはその2人が食中毒で死んでいるのを発見しました。

横井さんは**世間から隔絶**されたその小さな洞穴で1人で生活を続けました。食べ物を手に入れる

ために自分で狩りや釣りをし、やりなどの道具も作りました。衣類はヤシの木の繊維を編んで作りました。発見されることを恐れ、横井さんは行動のほとんどを洞穴で過ごしました。洞穴には二つの穴がありました。一つは横井さんの出入り口用でもう一つは換気口です。大きい方の穴には横井さんがジャングルから身を隠すために竹や葉から作った蓋がついていました。今その場所の近くには、グアムの観光客に最も人気があるスポットの一つである川や美しい滝があります。横井さんは上手に隠れていたため、長い間終戦を知らずにいました。横井さんは後にこう語っています。「やっと終戦を知ったが出ていきたくなかった。生きて帰るなんて恥ずかしいことだ」1972年、横井さんは、洞穴近くの川で釣りをしているところを地元の2人の農民に発見されたのです。



そしてついに、**28年間**ものジャングル生活を終え、彼は日本に帰国しました。「横井庄一、恥ずかしながら帰ってまいりました」との言葉を横井さんは発しました。日本で横井さんは英雄として扱われ、ジャングルからの生還者として多くの人々から尊敬されました。帰国後、昭和天皇にお目にかかる機会に恵まれた横井さんは、この日のことを「人生で最も光栄な日」としてしています。その後帰郷した横井さんは、戦地に赴く前に思いを寄せていた地元の女性と結婚しました。1997年、横井さんは心臓発作のため82歳で死去。亡きがらには、横井さんが戦地に行く1955年に横井さんのお母さんが建立したお墓に安置されたのでした。そして今日、横井さんの死後もなおグアムのうっそうとしたジャングルに、横井さんが住んでいた暗く静かなあの隠れ家が残されています。